

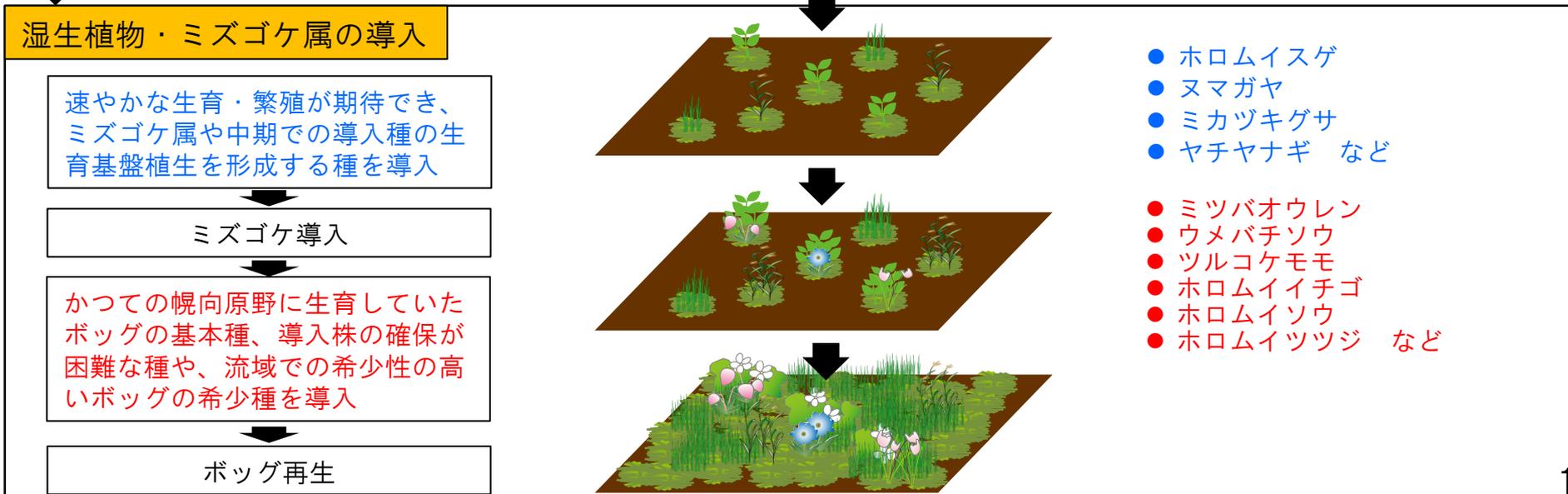
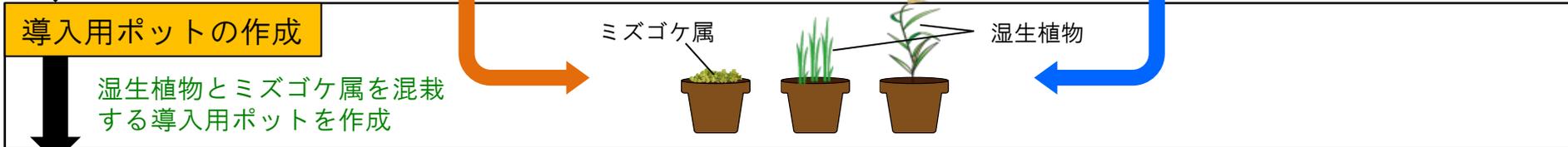
湿原再生ミーティング活動報告

平成 31 年 2 月 27 日

幌向再生ワークショップ 湿原再生ミーティング

1. 湿生植物の導入手法

- 再生目標とするボグの構成種は、泥炭裸地に先駆的に定着しにくい種や、他の湿原植生基盤を必要とする種等が含まれるため、**自然の植生遷移に沿って導入する種を選定**する。
- 導入は**順応的管理**の原則に従って、植生定着状況を確認しながら**段階的に導入**する。



1. 湿生植物の導入手法

- 植生の導入に際しては、各地域個体群の遺伝子の保全を十分に考慮し、湿原生態系に影響が生じないように配慮し、下記の考え方に沿って導入元の個体群を選定する。

- ① 導入元の対象とする地域は、**かつての幌向原野とその周辺地域を基本**とし、以下の地域で段階的に導入種を確保する。

第一段階：旧幌向原野

- ・夕張川
- ・越後沼 など

第二段階：石狩平野

- ・東野幌
- ・宮島沼、美唄湿原

・石狩川[美原地区] など

第三段階：石狩低地帯

- ・勇払湿原群 など

これまでに
種苗採取を
行った箇所

- ② 導入元の許可を得たうえで、導入元の株・種子の採取は最小限にとどめる。
- ③ 導入種の**導入元が常に明確**に示せるように、導入記録を作成する。
- ④ 導入候補種のうち、①の地域で**確保が不可能な種**については、自然散布種子や埋土種子などからの自然定着種や導入種の生育状況をモニタリングのうえ、**導入の可否**を有識者を交えた協議のもと検討する。



2. 湿生植物の導入

- 幌向再生地に導入する湿生植物は、かつての幌向原野とその周辺に現存する湿地から、管理者の許可を得て、湿原生態系に影響が生じない程度の種子採取を行い、育苗した苗を導入している。
- 幌向再生地への導入は、取り組みの効果を科学的に検証するための重点区域のほか、地域住民等に移植体験を通じて、取り組みに参加してもらうための区域を設け、地域協働で幌向の湿地再生を目指している。



重点区域への導入(調達した苗 H29.10)



重点区域への導入(導入作業 H29.10)



重点区域への導入(導入した湿生植物 H29.10)



WSメンバーによる指導(H30.9)



イベント参加者による導入作業(H30.9)



イベント参加者によるミズゴケ作成(H30.9)

2. 湿生植物の導入

- これまでに導入した種は、ヤチヤナギ、コバギボウシ、ミカツキグサ、トマリスゲ（ホロムイスゲ）、ヤチイチゴ（ホロムイイチゴ）など、生育基盤を構成する18種を導入した。

写真は初期導入種12種



ヤチヤナギ



イソツツジ



ゼンテイカ



コバギボウシ



カキツバタ



ヌマガヤ



ワタスゲ



ミカツキグサ



ハイブツゲ



モウセンゴケ



トマリスゲ(ホロムイスゲ)



ホロムイコウガイ

3. 湿生植物の生育状況

- 導入した湿生植物の定着状況についてモニタリングを行い、ボッグ湿原の形成評価、各湿生植物の生育適地の分析等を行う。

導入した苗



2017年11月(導入直後)

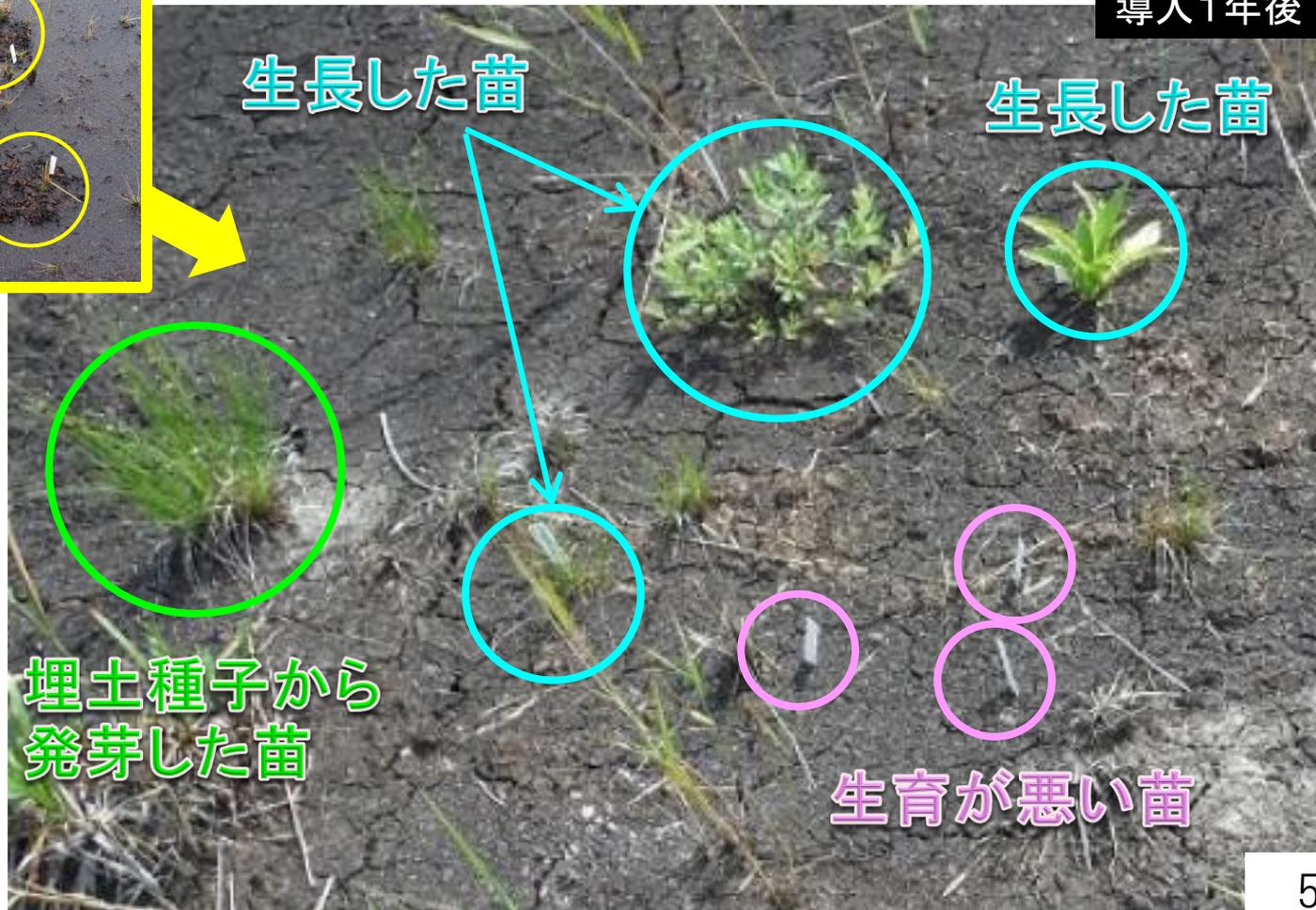
導入1年後

生長した苗

生長した苗

埋土種子から
発芽した苗

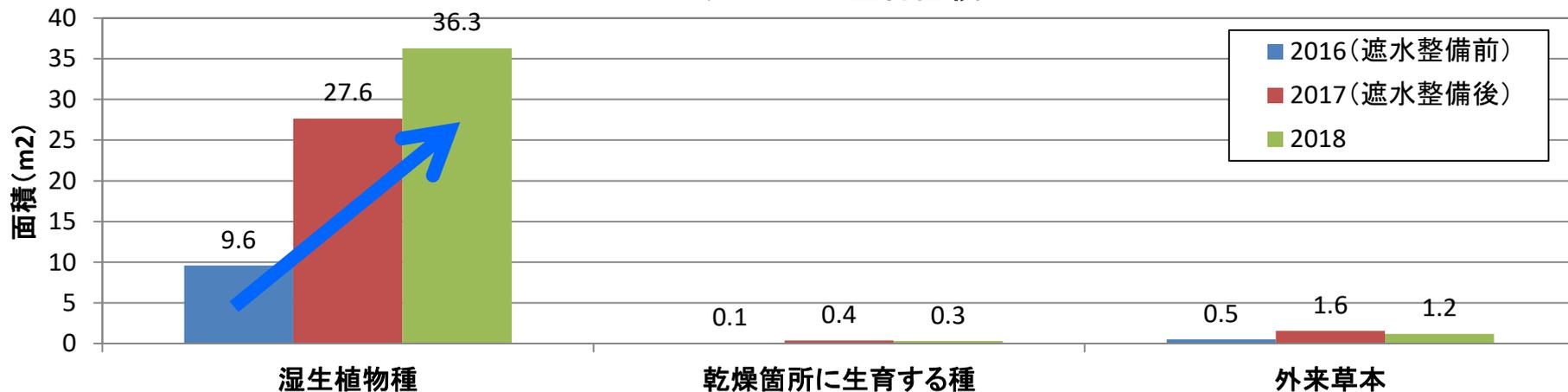
生育が悪い苗



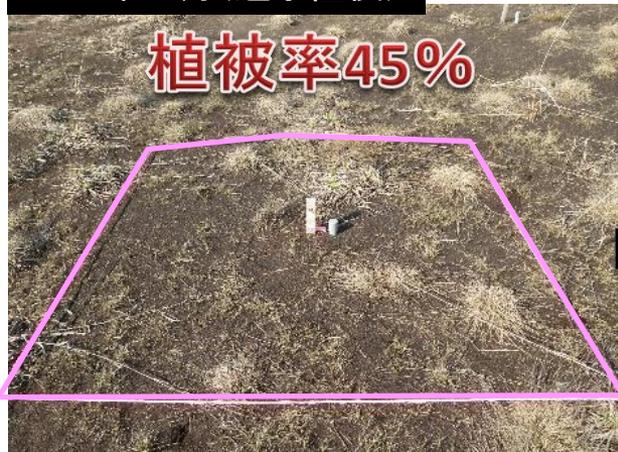
3. 湿生植物の生育状況

- 湿生植物の導入箇所には調査用の枠を設けて、導入した植物の生育状況をモニタリングしている。
- 遮水整備によって、湿生植物が生育する基盤が整い、生育面積が増加している。

全コドラート内の生育面積



2016年10月 (遮水直後)



2017年8月



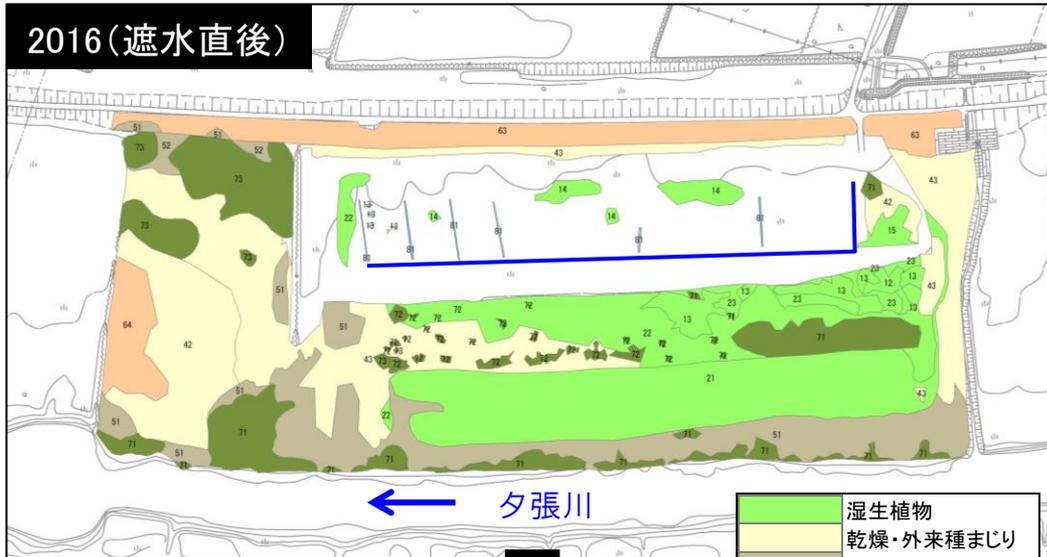
2018年8月



No331

3. 湿生植物の生育状況

● 遮水整備、植生導入により、当初裸地だった幌向再生地は、徐々にオオイヌノハナヒゲ、ホロムイコウガイ等の植生が定着しつつある。



4. ミズゴケの導入計画

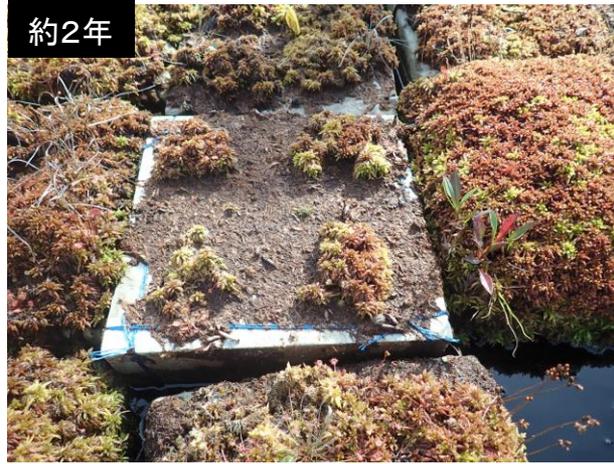
- 幌向再生地において、自作のフロートでミズゴケを育苗しており、5年程度で十分な大きさに成長する。
- 5年程度成長したミズゴケを基に、ピートモスポットを用いて再生地に導入する。

フロートでのミズゴケの成長 5年程度で株分け可能な十分な大きさに成長する。

0年



約2年



約5年



試験的に導入したミズゴケ

冠水後に水没する状態となるが、枯死などは見られない。



4. ミズゴケの導入計画

- ミズゴケの導入は、オオイヌノハナヒゲなど、被陰効果の期待できる種が生育する箇所は、その根元に寄せて導入し、植生が生育していない箇所には、ミズゴケ同士を寄せて導入する。

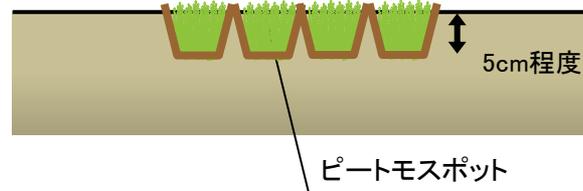
重点区域②

2018.10.3撮影



自生種の生育しない箇所

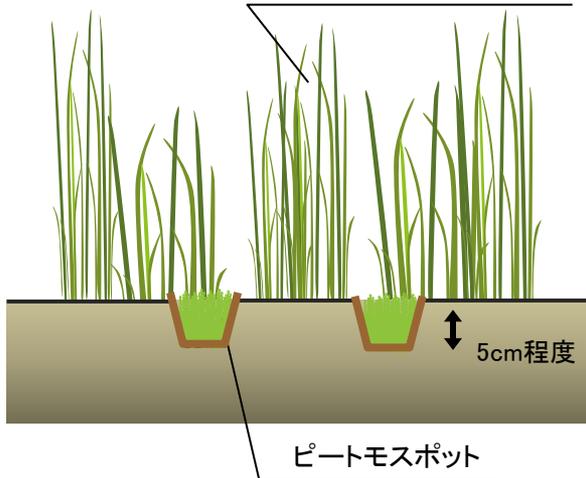
ミズゴケ同士を寄せて導入



自生種の生育箇所

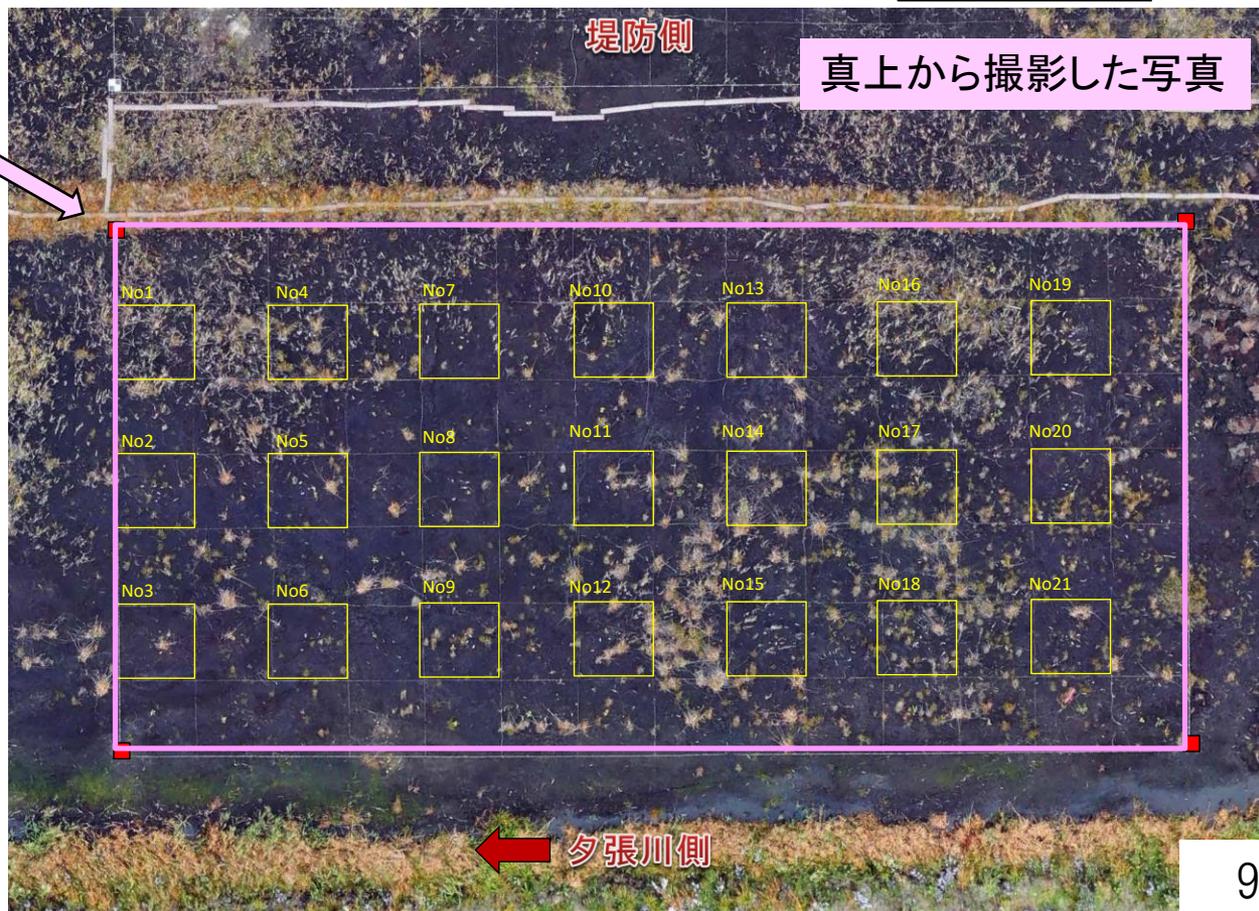
自生種の根元に導入

自生植物による被覆効果



堤防側

真上から撮影した写真



夕張川側

5. 今年度のまとめ

- 物理環境調査（表層地下水位、pH、EC）の調査結果より、遮水整備後の物理環境は、ボッグの生育条件を満たしていることを確認した。
- 湿生植物の生育状況調査を行い、遮水整備後に幌向再生地の植生面積が拡大し、ボッグ環境に生育する種が定着・増加していることを確認した。
- 平成30年度は、重点区域にイソツツジ、ミカツキグサなど6種1,260株、一般区域にノハナショウブなど7種750株を導入した。
- 平成29年度とあわせて、これまで重点区域に14種3,960株、一般区域に7種1,115株を導入した。
- ミズゴケ属の導入計画を立案した。
- 知見が不足しているラン科植物について、発芽手法の試験を継続している。